



<ベルサイユ賞>受賞を記念した特別企画展

『周辺・開発・状況 — 現代美術の事情と地勢 —』 開催

2025年4月26日(土) — 7月21日(月・祝)

このたび下瀬美術館では2025年4月26日(土)から7月21日(月・祝)まで「周辺・開発・状況 -現代美術の事情と地勢-」展を開催いたします。

本展は2024年に<ベルサイユ賞>(ユネスコ本部創設の建築賞)を受賞した記念として行われる特別企画展で、当館にとって初の現代美術展となります。チーフキュレーターに美術家の齋藤恵汰を迎え、コキュレーターとして松山孝法、李静文、根上陽子が参加いたします。

また中国、インドネシア、韓国、ミャンマー、シンガポールなど、東アジアにルーツを持つアーティストが参加する国際展として日本からは遠藤薫、金理有、久木田大地、鈴木操、MADARA MANJI、韓国からオミョウ・チョウ(Omyo Cho)、中国からジェン・テンイ(鄭天依)、インドネシアからムハマド・ゲルリ(Muhamad Gerly)、ミャンマーからソー・ユ・ノウエ(Soe Yu Nwe)が参加いたします。

アーティスト9組とキュレーター4名はそれぞれ1980年~2000年生まれの若手作家・キュレーターで、海外拠点の4名は日本の美術館では初となる作品発表の機会となります。

<お問合せ>

一般: 下瀬美術館 Tel: 0827-94-4000 / Fax: 0827-94-4100 / Mail: info@simose-museum.jp

住所: 広島県大竹市晴海二丁目10-50

広報: 倉田 Mail: yoshiko.krt@gmail.com



<ベルサイユ賞>にて「世界で最も美しい美術館」に輝いた下瀬美術館の建築は、2014年に「建築界のノーベル賞」とも呼ばれるプリツカー賞を受賞した坂茂（ばん・しげる）によるもので、広島県大竹市の海岸線と平行にエントランス棟、企画展示棟、管理棟が並び建ちます。各建物が渡り廊下でつながれており、それらを長さ190m、高さ8.5mの「ミラーガラス・スクリーン」で一体化。このミラーガラス・スクリーンに周囲の自然が映り込むことで、建築の存在が瀬戸内の風景に溶け込み、美しい景観を形成しています。

今回チーフキュレーターの齋藤は、このミラーガラス・スクリーンによる美術館と周辺環境の一体化から思考を開始しました。また造船開発の技術を使った可動展示室、美術館の向かいに日本屈指の観光地である宮島を擁する立地状況を踏まえ、それらにตอบสนองしていく展示として構成いたしました。この美術館と宮島の関係を相似形に展開していけば、やがて広島県と瀬戸内海の関係や、日本と東アジアの関係を再考するヒントになるのではないかと考えたのです。「周辺・開発・状況-現代美術の事情と地勢-」というタイトルは、「environment」以外にも多角的な意味がある日本語の環境という単語からインスピレーションをうけ展開されたキュレーションを表現するものです。

私たちは周辺に存在する出来事や開発の現場、あるいはある状況に接した際に私たちに与えられる効果のことを「環境」と表現します。本展に集う9名のアーティストが下瀬美術館というフロンティアを目の前にして、そこから生じる出来事や現場や状況に対してどのような作品を発表するのか、是非ご高覧ください。

｜ 出展アーティスト一覧 ｜

遠藤薫（えんどう・かおり） | 1989年 日本・大阪府出身 東京拠点 | [@_kaori_endo_](#)

オミョウ・チョウ | 1984年 韓国・ソウル市出身 ソウル拠点 | [@omyocho](#)

金理有（きむ・りゆう） | 1980年 日本・大阪府出身 信楽拠点 | [@riyookim](#)

久木田大地（くきた・だいち） | 2000年 シンガポール・神奈川県出身 東京拠点 | [@daichi_kukita](#)

鄭天依（ジェン・テンイ） | 1995年 中国・湖北省武漢市出身 香港・オランダ拠点 | [@zheng_tianyi](#)

鈴木操（すずき・そう） | 1986年 日本・埼玉県出身 東京拠点 | [@sou_suzuki_](#)

ソー・ユ・ノウェ | 1989年 ミャンマー・シャン州出身 多拠点 | [@soeyunwe](#)

MADARA MANJI（まだら・まんじ） | 1988年 日本・東京都出身 埼玉拠点 | [@madara_manji](#)

ムハマド・ゲルリ | 1997年 | インドネシア・西ジャワ州カラワン県出身 カラワン拠点 | [@muhamadgerly](#)

<お問合せ>

一般：下瀬美術館 Tel：0827-94-4000 / Fax：0827-94-4100 / Mail：info@simose-museum.jp

住所：広島県大竹市晴海二丁目10-50

広報：倉田 Mail：yoshiko.krt@gmail.com



| 開催概要 |

会期	2025年4月26日(土) - 7月21日(月・祝)
休館日	月曜日 (祝日の場合は開館)
開館時間	9:30 - 17:00 (入場は16:30まで)
観覧料	一般円2,000円(1,800円) 高校生・大学生1,000円(800円) 大竹市民1,500円 中学生以下無料 () 内は20名以上の団体
主催	一般財団法人下瀬美術館 / 中国新聞社
アクセス	大竹ICより車で5分 JR大竹駅またはJR玖波駅より市営バス「こいこいバス」で10分の後、徒歩5分
出展作家	遠藤 薫 / オミョウ・チョウ / 金 理有 (キム・リュウ) / 久木田 大地 / 鄭 天依 (ジェン・テンイ) / 鈴木 操 / ソー・ユ・ノウェ / MADARA MANJI / ムハマド・ゲルリ
企画	齋藤 恵汰
共同企画	李 静文 / 根上 陽子 / 松山 孝法
広報	倉田 佳子
デザイン	八木 幣二郎
運営協力	TAV GALLERY / Living Together Co.
web	https://simose-museum.jp/
広報用画像 リンク	https://x.gd/xY3Yg
内覧会回答フォーム	https://forms.gle/4q7g3oer7VYRfTnp8

<お問合せ>

一般：下瀬美術館 Tel：0827-94-4000 / Fax：0827-94-4100 / Mail：info@simose-museum.jp
住所：広島県大竹市晴海二丁目 10-50
広報：倉田 Mail：yoshiko.krt@gmail.com



| 見どころ |

1. 2024年に「世界で最も美しい美術館」としてベルサイユ賞を受賞した下瀬美術館

<ベルサイユ賞>は2015年に国連教育科学文化機関（ユネスコ）の本部で創設された建築賞で、世界中の空港、商業施設、ホテル、スポーツ施設など8つのカテゴリーを対象に著名な建築家や哲学者らの審査によって選出される世界的な建築賞です。各部門へのノミネートから3施設に対して、最優秀のベルサイユ賞、内装特別賞、外装特別賞の3つの賞が授与されます。2024年6月に下瀬美術館を含む世界の7つの美術館・博物館が「世界で最も美しい美術館」としてノミネートされ、下瀬美術館が12月2日の表彰式でベルサイユ賞を受賞しました。

2. 下瀬美術館初の現代美術展

下瀬美術館は、広島市内に本社を構える建築資材の総合メーカー「丸井産業株式会社」が2018年に創業60周年を迎えたのを機に構想され、2023（令和5）年3月に開館しました。代表取締役である下瀬ゆみ子が先代の創業者・下瀬福衛と下瀬静子から受け継ぎながら形成してきたコレクションの保存・公開を中心に、国内外の美術工芸品の収集・保存・調査研究、展覧会企画などの活動を行っています。丸井産業株式会社は、企業理念のひとつにある「創業の原点は新製品に在り」という言葉の通り、ゼロから創る創造力を大切に、常に新たな挑戦をして参りました。こうした姿勢をもとに、日本から若いアーティストやキュレーターが世界へ羽ばたくチャレンジとして、このたびゲストキュレーターを招いた特別展を企画いたしました。

3. 海外作家4名全員が日本の美術館で初の作品発表

本展は日本に加えて、韓国、中国、インドネシア、ミャンマーからも若手作家が参加いたします。

韓国出身のオミョウ・チョウ（Omyo Cho）は、ゴールドスミス美術学部を卒業後、2019年に開催した個展より精力的な活動を行い、2024年にはアート・バーゼル・ステートメント部門に作品「ヌーディ・ハルシネーション」（2023年、スイス）がノミネートされました。

中国出身のジェン・テンイ（鄭天依）は現在、香港とオランダを拠点に美術作家・メディア研究者として活動の幅を広げており、今回の展覧会では人間の記憶と技術の歴史が絡み合う詩的なインスタレーションを発表する予定です。

インドネシア出身のムハマド・ゲルリ（Muhamad Gerly）は、インターメディアアーティストとして今までイギリス、オーストラリアなど国内外で作品発表を行うほか、南バンドンの公共スペースでの作品制作や、パフォーマンス・アートに焦点を当てたコレクティブ「パフォーマンス・ラー」などでも活動しています。

ミャンマー出身の陶芸作家で中国系三世でもあるソー・ユ・ノウェ（Soe Yu Nwe）は、大英博物館やクイーンズランド美術館をはじめ数々の美術館での作品発表を行うほか、「Forbes Asia 30 Under 30（Art & Style 2019）」に選出されています。本展では仏教神話に登場する女性像にインスピレーションを得た最新作を発表予定です。

<お問合せ>

一般：下瀬美術館 Tel：0827-94-4000 / Fax：0827-94-4100 / Mail：info@simose-museum.jp

住所：広島県大竹市晴海二丁目10-50

広報：倉田 Mail：yoshiko.krt@gmail.com



| アーティストプロフィール |

遠藤薫 (えんどう・かおり)

1989年、大阪府生まれ。

遠藤薫は2013年に沖縄県立芸術大学工芸専攻染織科を卒業。2016年志村ふくみ主宰アルスシムラを卒業。沖縄や東北をはじめ国内外で、その地に根ざした工芸と歴史を基盤に、生活と密接な関係にある社会的、政治的な関係性を紐解く。また主に工芸技法を用いて「工芸」の拡張を試みている。その作品形態は、雑巾や落下傘、船の帆を含む舟そのもの、ガラスや陶芸など多岐にわたる。近年は無意識の形に触れるべく、自身の夢から得た作品制作のアプローチをとる。主な展覧会に、「国際芸術祭あいち2022」(2022、一ノ宮市豊島記念資料館、愛知)、「Osaka Directory3 遠藤薫『重力と虹霓ー南波照間島について』」(2023、大阪中之島美術館、大阪)「美術の中のかたちー手で見ると造形 遠藤薫『眼と球』」(2023、兵庫県立美術館、兵庫)がある。Instagram [@_kaori_endo](https://www.instagram.com/_kaori_endo)

オミョウ・チョウ (Omyo Cho)

1984年、ソウル市生まれ。

オミョウ・チョウはゴールドスミス美術学部を卒業。2019年に個展「タクシデルミア」で活動をスタートした。チョウは彫刻、インスタレーション、ビデオを通じて、思索的な科学、深海の生物多様性、記憶に基づいた物語を探求している。彼女のディストピア小説『ヌーディ・ハルシネーション』(2022〜)は、商品化された記憶の未来を思い描いており、人間中心の思考を批判し、未来の知性を想像する作品の基礎となっている。チョウの活動は、e-flux、ARTnews、Oculaなどの記事で紹介されている。主な展覧会や上演にフリーズフィルムソウル2023で上映された「バレル・アイ」(2022-23年、韓国)、2024年のアート・バーゼル・ステートメント部門にノミネートされた「ヌーディ・ハルシネーション」(2023年、スイス)などがある。Instagram [@omyocho](https://www.instagram.com/omyocho)

金理有 (きむ・りゆう)

1980年、大阪府生まれ。

金理有は日本人の父と韓国人の母のもとに生まれた。大阪芸術大学大学院 芸術制作研究科修士課程を修了。同大学院芸術研究科研究員、同大学院非常勤助手を経てアーティストとして独立。

金は縄文土器やその他古代の遺物のように一万年後の未来に残る作品を作るべく制作を行っている。その枠にとらわれない越境的な活動は現代美術家としても評価されている。

国内での個展を多数開催すると同時に、横浜をはじめとして、韓国、香港、フランス、アメリカ、シンガポール、マレーシア等、様々な国での芸術祭、企画展、コンペティションに参加している。

主な受賞に神戸ビエンナーレ2009・現代陶芸展準大賞。主な展覧会に、「Ceramics as new exoticism」(2010、INAX ガレリアセラミカ、東京)、ヨコハマトリエンナーレ2011(2011、横浜美術館、神奈川)「ARTs of JOMON 展」

(2013、hpgrp NEW YORK、アメリカ)など。2018年度、陶芸で知られる甲賀市信楽町にある「滋賀県立陶芸の森」のゲストアーティストとして、レジデンスプログラムに参加した。Instagram [@riyookim](https://www.instagram.com/riyookim)

<お問合せ>

一般：下瀬美術館 Tel：0827-94-4000 / Fax：0827-94-4100 / Mail：info@simose-museum.jp

住所：広島県大竹市晴海二丁目10-50

広報：倉田 Mail：yoshiko.krt@gmail.com



久木田大地（くきた・だいち）

2000 年生まれ。

久木田大地は西洋絵画の歴史と技法材料への興味をきっかけに、「現代社会において古典絵画がいかに受容されているか。」という事柄を念頭に置き、名画中のイメージを引用しながら、要素を反復する・ぼかす・組み換えるなどによって視覚的な愉しさを探っている。久木田の制作は美術館のショップに大量に陳列される図録、海外の露店に並べられた色とりどりの名画のフィギュア、インターネットで名画を画像検索した際に等しいイメージが画面を埋め尽くす様子など、生活の中で古典絵画を目にする状況そのものからインスピレーションを得ている。主な展覧会に「FACE2023」（2023 年、SOMPO 美術館、東京）、個展「Repetition」（2024 年、GALLERY b.TOKYO、東京）など。また、同世代の作家と共同アトリエの運営などを行っている。Instagram [@daichi_kukita](#)

鄭天依（ジェン・テンイ）

1995 年、中国・湖北省武漢市生まれ。コンテンポラリーアーティスト。

鄭天依はフランク・モール・インスティテュートでメディア・アート・デザイン・テクノロジーの MFA（芸術学修士）を、香港中文大学で美術の BA（学士号）を取得している。香港とオランダを拠点に活動する学際的なアーティスト。鄭の作品は、映像、インスタレーション、パフォーマンスなどのメディアを横断しながら、現代社会の文脈における、アイデンティティ、記憶、そして移動（ディスプレイメント）のテーマを探求している。彼女の実践は、人間とノンヒューマンの主体との相互作用に深く踏み込み、現在における過去の残存を問う概念であるホントロジーを扱うことが多くある。鄭はヨーロッパとアジアで幅広く作品を発表しており、近年のプロジェクトでは時間の循環的な性質や、ファウンド・オブジェクト（発見された物体）に宿る幽玄な痕跡に焦点を当てている。近年の主な展覧会に「Hong Kong Qi」（深圳、2024）、「A Collection of Urban Nothingness」（ロッテルダム、2023）、「Ship of Fools」（香港、2023）などがある。

Instagram [@zheng_tianyi](#)

鈴木操（すずき・そう）

1986 年、埼玉県生まれ。彫刻家・文筆家。

鈴木操は文化服装学院を卒業後、ベルギーへ渡る。帰国後、コンテンポラリーダンスや現代演劇の衣裳デザインアトリエに勤務。その傍ら彫刻制作を開始した。主に彫刻が持つ複雑な歴史と批評性を現代的な観点から問い直し、物質と時間の関りを探る作品を手がけている。2019 年から、彫刻とテキストの関係性を扱った「彫刻書記展」や、ファッションとアートを並置させた「the attitude of post-industrial garments」など、展覧会のキュレーションも展開している。また 2022 年から、ファッションやアートなどを取り扱うウェブメディア「FASHIONSNAPE.COM」にて連載。その他「ARTnews JAPAN」など様々なメディアで文筆活動を行っている。主な展覧会に、「open the door,」（2018 年、roomF 準備室、東京）「fortunes」（2023 年、TAV GALLERY、東京）がある。Instagram [@sou_suzuki](#)

<お問合せ>

一般：下瀬美術館 Tel：0827-94-4000 / Fax：0827-94-4100 / Mail：info@simose-museum.jp

住所：広島県大竹市晴海二丁目 10-50

広報：倉田 Mail：yoshiko.krt@gmail.com



ソー・ユ・ノウェ (Soe Yu Nwe)

1997年、ミャンマー・シャン州生まれ。

ソー・ユ・ノウェはミャンマーの中国系三世の陶芸作家で、粘土を使った手づくりの彫刻を制作している。仏教神話に登場する女性像にインスピレーションを得た彼女の最新作では、女性のアイデンティティにおける「自由」の概念を探求する。これまでにジャカルタ現代陶芸ビエンナーレ（2016年、インドネシア）やタイ・ビエンナーレ（2023年、タイ）で作品を発表、また、アートサイエンス・ミュージアム（シンガポール）、大英博物館（ロンドン）、サムスン・リウム美術館（ソウル）、クイーンズランド美術館/現代美術館 [QAGOMA]（ブリスベン）等で展示を行っている。ソー・ユは「Forbes 30 Under 30 (Art & Style 2019)」に選出され、また、2023年には CARE USA とロックフェラー財団から「Advocacy and the Arts Fellowship」を、2021年にはゲーテ・インスティテュート「Reconnect Grant」を授与された。現在、陶芸で知られる甲賀市信楽町にある「滋賀県立陶芸の森」のゲストアーティストとして、レジデンスプログラムに参加している。

Instagram [@soeyunwe](#)

MADARA MANJI (まだら・まんじ)

1988年、東京都生まれ。

MADARA MANJI は19歳から京都の彫金職人に師事し、金属加工の基礎技術を学んだ。その後、異なる種類の金属板を複数枚重ね合わせ、熱で溶着したのち削り出すことによって木目のような文様を浮かび上がらせる日本発祥の金属工芸、杢目金（もくめがね）を独学で習得し、立方状のオブジェや、コンクリートと組み合わせた彫刻作品を制作する。また、近年は「場所との因果関係」をコンセプトに、様々なプロジェクトを構想・展開。土地性や環境、建築に相互作用を与えるインスタレーションを制作している。2017年、個展「Antagonism and Transcendence」(Whitestone Gallery KARUIZAWA)でデビュー以降、国内外のギャラリー、アート・フェアで新作を発表。2023年、これまでの活動をまとめた作品集『SOLID』を発表。同年末、デビューから最新作までの活動を回顧的に眺める個展「ALIVE」を山ノ内町立志賀高原ロマン美術館にて開催。2024年、大型の鉄のキューブ《ALIVE》を標高1,280mに位置する小海町高原美術館の野外空間に常設。Instagram

[@madara_manji](#)

ムハマド・ゲルリ (Muhamad Gerly)

1997年、インドネシア・西ジャワ州カラワン県生まれ。インターメディアアーティスト。

ムハマド・ゲルリは2017年-2021年、バンドンのテルコム大学でインターメディアアートを学んだ。歴史、民間伝承、空間的なランドスケープ、ローカルな土地の知恵・価値観がゲルリの創作の原動力となっている。ゲルリは創作プロセスにおいて常に文学的・詩的な創作手法を用い、出会うすべての出来事から意味と詩的表現を紡ぎ出す。観客に新たな視覚的可能性と解釈を切り開く作品鑑賞の場を生み出している。また、南バンドンの公共スペースで作品を制作することに焦点を当てたアート集団「Roompok Space and Artist Collective (ルームポック・スペース・アンド・アーティスト・コレクティブ)」の設立にも積極的に携わり、パフォーマンス・アートに焦点を当てたアートコレクティブ「パフォーマンス・ラー (Performance Rar)」でも活動している。主なグループ展に、「Valance of violence」(2024年、イギリス)、「POLYTOPIA -re.birth-」(2024年、オーストラリア)「Group Exhibition YxG」(2022年、インドネシア)他がある。

Instagram [@muhamadgerly](#)

<お問合せ>

一般：下瀬美術館 Tel：0827-94-4000 / Fax：0827-94-4100 / Mail：info@simose-museum.jp

住所：広島県大竹市晴海二丁目 10-50

広報：倉田 Mail：yoshiko.krt@gmail.com



| キュレータープロフィール |

齋藤恵汰（アーツカウンシル金沢ディレクター、ShibuCreation 株式会社代表取締役）

1987年東京生まれ。

2008年、同時代のアーティストをインキュベーションするシェアハウス「渋谷家」を創設、一貫して東京のアートシーンのキュレーションに携わってきた。並行して美術・演劇・批評に関する活動を横断的に行い「若者文化としての現代美術」をテーマに研究・実践を行う。主なプロジェクトに渋谷家（2008年-）、アーギュメンツ（2015-2018年）、集まるのが大事（2020-2021年）など。2019年より金沢と東京での二拠点生活を開始、2021年よりアーツカウンシル金沢ディレクター。2015年頃よりライブ演出チーム huez を中心にイベント演出事業を行っている ShibuCreation 株式会社代表取締役。主な展示に「私戦と風景（2016年、埼玉・原爆の図 丸木美術館）」、「自営と共在（2017年、沖縄・BARRAK 大道）」、「構造と表面（2019年、東京・駒込倉庫）」など。主な上演に「非劇（2015年、武蔵野文化財団・吉祥寺シアター）」など。Instagram [@_satoketa](#)

松山孝法（株式会社 BUCCHIGIRI Production 代表取締役、渋谷家 18 代目代表）

1987年大阪生まれ。

2010年から2014年まで京都市にてオルタナティブスペース「Factory Kyoto」の運営に携わる。その中で、企画展や個展のキュレーション、アートフェアへの参加などを継続的に行った。また並行してコミュニティに焦点を当てたイベント等を企画・開催。コロナ禍の2020年～21年、広範な文化人・言論人を招いた合宿型の勉強会「集まるのが大事」を主催。1ヶ月民泊を開放し続けたレジデンス企画「Factory Tokyo」を実施。また参加者を擬似コミュニティとした「社員旅行」などを開催している。2023年よりアーティストコレクティブ「渋谷家」の代表に就任。2024年8月よりアーティストマネジメントを主とした会社（株）BUCCHIGIRI Production を設立。代表取締役に就任。

李静文（インディペンデント・キュレーター）

2014年に来日、武蔵野美術大学彫刻学科を経て、現在は東京藝術大学の博士後期課程に在籍。彫刻の身体性と空間性をテーマにデジタルフィールドにおける彫刻概念の研究を深めている。東京を拠点に、ヤングジェネレーションとオルタナティブコミュニティを中心に企画や研究など幅広い分野で活躍。彫刻作家としてのバックグラウンドとメディア理論研究者の視点を融合し、日常的機能性を超えるテクノロジーの魅力を取り上げ、現時性と情動をキーワードに、物事のつながりに注目しながら、独自のキュレーションでポストメディア時代のアートシーンにおける冒険をする。過去には芸術団体「Upload AIR」の運営やウェブマガジン「The Colossus 巨像」の編集、アートコレクティブ「脱衣所」のメンバーとしても活躍。2024年にアーティストインレジデンス「D-O-U 成増」を創立し、現在は建築団体 GROUP と手を組み、スペースをリノベしている。WEB <https://lijingwen.icu/> | Instagram [@celiamo_](#)

<お問合せ>

一般：下瀬美術館 Tel：0827-94-4000 / Fax：0827-94-4100 / Mail：info@simose-museum.jp

住所：広島県大竹市晴海二丁目 10-50

広報：倉田 Mail：yoshiko.krt@gmail.com



根上陽子（キュレーター、アート・メディエーター、Living Together Co.代表）

津田塾大学学芸学部国際関係学科卒業。在学中にロンドンの Wimbledon School of Art に留学。政府系プロジェクトからエンターテインメント事業まで各種イベント事業や企画・プロデュースを行い、また芸術と多分野のコラボレーションを進めてきた。個人と社会の成熟過程と連環、多分野交流・共生に興味があり、「共に生きる」「共に創る」を軸にした新たなレジデンシープログラム、「co・iki」を2016年より展開。2021年に Living Together Co.を設立し、アート&サイエンス等の異分野、国際間の協働事業・文化プロジェクトマネジメント、アーティストエージェンシー、インドネシアのアートコレクティブ GUDSKUL と協働した教育プログラム開発等、各種企画運営・コンサルテーションを行っている。

「Creativity from HOME」（2020-2021年、リモート多所）、「共振”SONIC RESONANCE: Event for Heart, Mustles and Breath”」（2024年、KMD 主催、CCBT・東京）、ユネスコ・クリエイティブシティーズ・メディアアート・グローバルフォーラム パフォーマンス：STELARC（2024年、韓国・光州市、G.MAP）、「POLYTOPIA - re.birth -」展（2024年、メルボルン）他主催・キュレーション。WEB <https://living-together.co/> <https://co-iki.org/> | Instagram [@co.iki](#)

| 美術館プロフィール |

下瀬美術館 –アートの中でアートを観る。

世界で活躍する建築家 ばん しげる 坂 茂 氏が手がけた建築も楽しめる美術館。水盤に並ぶカラフルな「可動展示室」をはじめ、季節の草花が風にそよぐ「エミール・ガレの庭」や、瀬戸内の多島美を望める「望洋テラス」など、建築とアートを堪能するひとときをお楽しみいただけます。

WEB <https://simose-museum.jp/> | Instagram [@simose_artmuseum](#) | X [@SimoseMuseum](#)



エントランス棟のひのきの柱は、温かみのある心地よい香りでもみなさまをお出迎えます。



望洋テラスからは、坂氏が瀬戸内の島々から着想を得て設計した可動展示室の風景をお楽しみいただけます。

<お問合せ>

一般：下瀬美術館 Tel：0827-94-4000 / Fax：0827-94-4100 / Mail：info@simose-museum.jp

住所：広島県大竹市晴海二丁目 10-50

広報：倉田 Mail：yoshiko.krt@gmail.com

